学生が考える宇和海沿岸域の
小さな事前復興プランの提案（ビデオ発表）

佐田岬を継ぐ
（伊方町事前復興プラン）

東京大学院生：飯塚卓哉・小松航樹・小山晴也
畠山亜美・村田夏菜子

私達の提案では，災害時の避難経路や避難所，住宅や産業の復興問題を人口減少や少子高齢化，みかん農家の後継者減少といった地域の社会課題と合わせ，それらの包括的な解決策を探りました。佐田岬半島 55 集落を平時からつなぎ，災害が起っても住民の方々が最後の一人まで住み続けられるようにと思いを込めています。

伊方町事前復興プラン佐田岬を継ぐ，はじめに佐田岬 55 集落の概要について説明します。

1. **佐田岬55集落の概要**
2. コンセプトと方針
3. 旧三崎町の現状と課題
4. 旧三崎町への提案
5. 総括

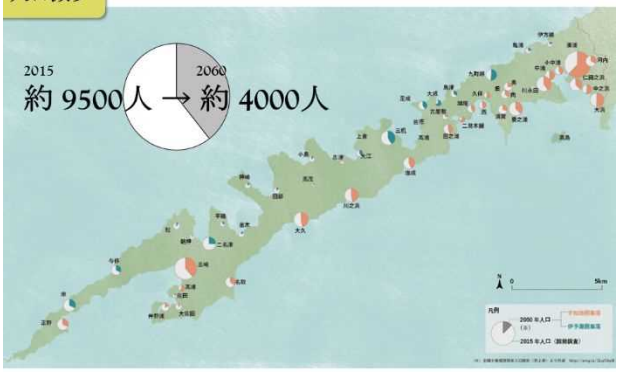
地理・産業

佐田岬は半島全体に 55 の集落が点在する地域です。これらの集落は江戸時代から合併を繰り返し，2005 年に半島全体が伊方町となりました。現在も 55 の集落それぞれが特色を持った暮らしを営んでいます。
歴史をみると漁業と柑橘農業の半農半漁の生活を送ってきましたが，現在は農業従事者も多くなっています。近隣の八幡浜市に働きに行く人も多いです。

生活

2005 年に合併する以前の伊方町，瀬戸町，三崎町の 3 つのまとまりの中心集落が通院，買物，行政などの場として現在も地域拠点としての性格を持っています。

人口減少



次に，人口についてです。伊方町の人口は，2060 年には現在の半分以下になると予想されています。特に人口の少ない小規模集落で人口減少は激しく，暮らしを支える仕組みが必要となります。

津波のリスク

次に，津波のリスクについてです。　伊予灘側は，津波が低く約 80 分で 3~4m の津波がくると予想されています。反対に宇和海側は，津波が高く 60 分から 70 分で 12~13m の津波がくると予想されています。三崎湊浦という地域の拠点となる集落は，宇和海側にあり大きな被害を受ける恐れがあります。

1. 佐田岬55集落の概要
2. コンセプトと方針
3. 旧三崎町の現状と課題
4. 旧三崎町への提案
5. 総括

コンセプト

**55集落に住みたい人を
最後の一人まで
受け止める**

次に，提案のコンセプトと方針について説明します。私達の提案のコンセプトは 55 集落に住みたい人を，最後の一人まで受け止めるです。人口減少や災害という背景の中で住む人が少なくなっても，最後の一人までが豊かに暮らせることのできる計画を考えました。

事前復興プランの方針

1. 中心集落を災害に強い集落に

2. 佐田岬らしさを残す

3. 中心集落から広がる豊かな暮らし

2020/4/13　10

そのための方針は 3 つです。
一つ目は，地域の拠点となる中心集落を災害に強い集落にすること。
二つ目は，集落の構造を変える時に佐田岬らしさを残すこと。
三つ目は，中心集落を拠点として既存の交通手段を活用しながら周辺集落の暮らしを豊かにすることです。
私達はこの方針に基づいて，旧三崎町の三崎集落を中心に具体的な事前復興プランを考えました。

1. 佐田岬55集落の概要
2. コンセプトと方針
3. 旧三崎町の現状と課題
4. 旧三崎町への提案
5. 総括

避難の課題

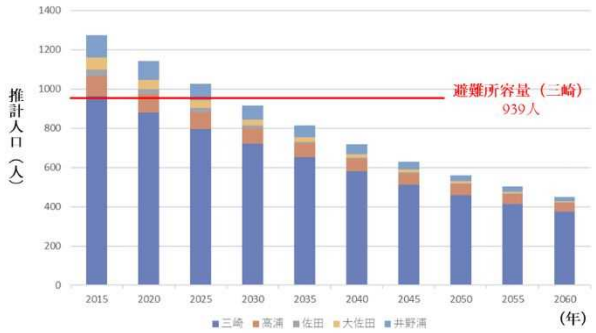
次に，旧三崎町の現状と課題について説明します。中心集落である三崎は集落のほとんどの場所が，津波で浸水する恐れがあります。津波がきた際の指定避難所は集落の東西の端に「三崎高校」と「つわぶき荘」の二つがあります。しかし，集落の中心部からはどちらの避難所へも歩いて 20 分かかります。そのため集落中心部でも避難のしやすい計画作りが必要です。

避難の課題

三崎の南側にある佐田，大佐田，井野浦といった集落には集落内には避難所がありません。そのため一

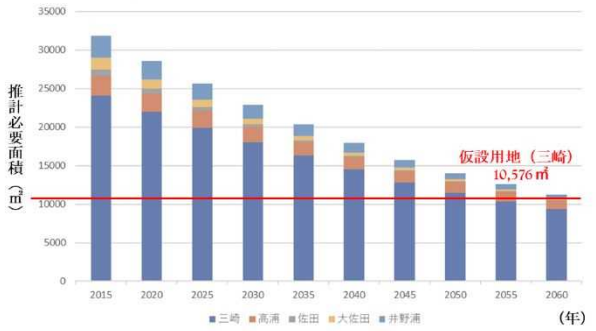
旦山側へ逃げた後になるべく早く避難所施設に行くことができるようにならければいけません。
ですが，三崎へ向かうには海沿いの道を通って行く必要があり，避難所を向かうのが遅れる心配があります。

避難所容量



三崎にある避難所は939人を収容できる容量があります。しかし，現在の三崎と周辺集落の人口を合わせると1,000人を超えるため，避難所の容量が足りなくなる可能性があります。

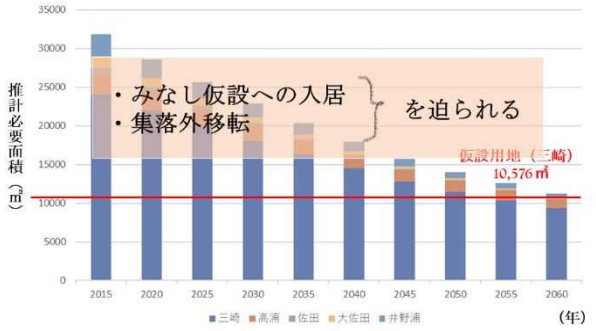
仮設住宅用地



※1戸当たり100㎡，避難者の50%が建設型仮設住宅を希望すると仮定

また，三崎にある仮設住宅を建設可能な用地の面積は 10,576 ㎡です。現在の三崎と周辺集落の住民のうち半数が仮設住宅を希望する場合，倍以上の土地が必要となります。

仮設住宅用地



※1戸当たり100㎡，避難者の50%が建設型仮設住宅を希望すると仮定

そのため，多くの方がみなし仮設への入居や集落外への移転をする必要が出てきてしまいます。

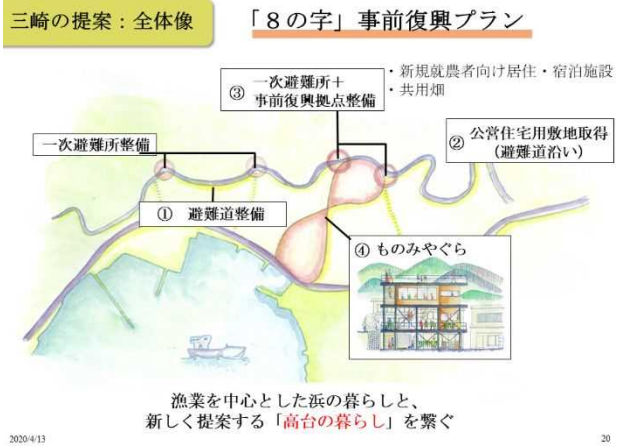
住宅再建の課題

このように三崎は低地の全域が浸水集落でありながら高台に復興期に活用できる平地がないため，予め高台に平地を整備しておく計画が必要といえます。

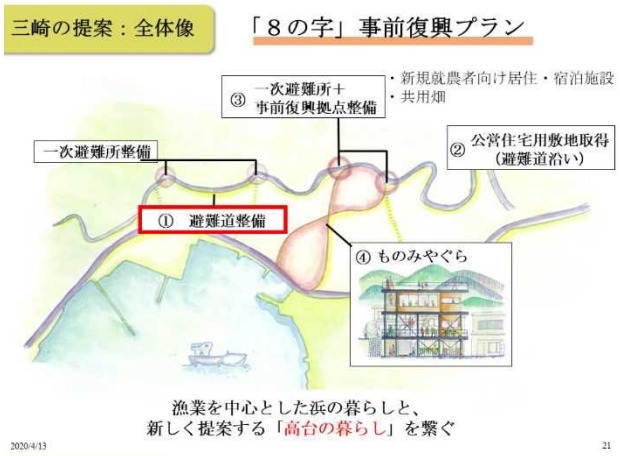
1. 佐田岬55集落の概要
2. コンセプトと方針
3. 旧三崎町の現状と課題
4. **旧三崎町への提案**
5. 総括

では中心集落である旧三崎町をどのように災害に強い町にしていくか提案致します。

三崎の提案：全体像

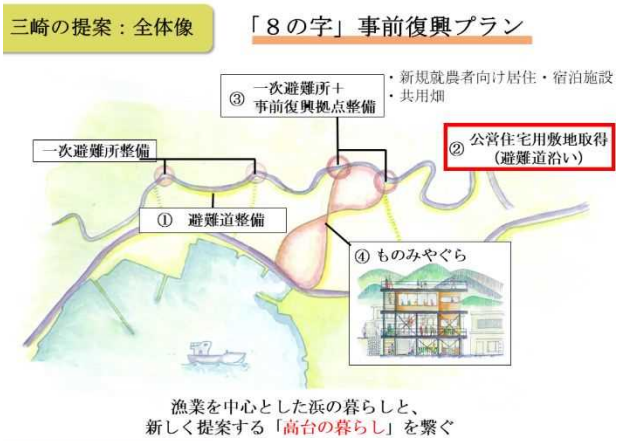


港町である三崎は，現在まちの機能の中心は津波被害予想される低地に集中しています。それらを徐々に高台に移行していける，かつ低地との繋がりも残す提案として「8 の字」事前復興プランを考えました。



まず初めに高台に避難道を整備します。現在三崎では高台を横移動できる農道などがいくつかあります。それらを活用し東西に横移動できる避難道を事前に整備します。

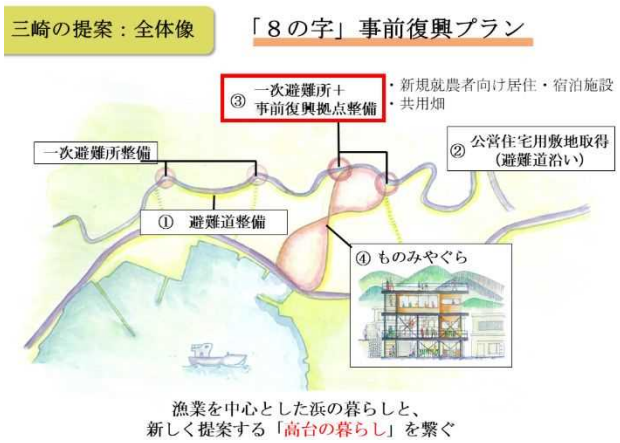
実際に津波が起きた際，まずは最短距離で逃げられる高台に避難します。高台での横移動ができる避難道を整備することによって，その後，高台の道を通って早期に避難所まで辿り着くことができるようになります。また，一時避難所を各所に整備すれば，土砂災害との複合災害が起こった場合も待機することが出来ます。



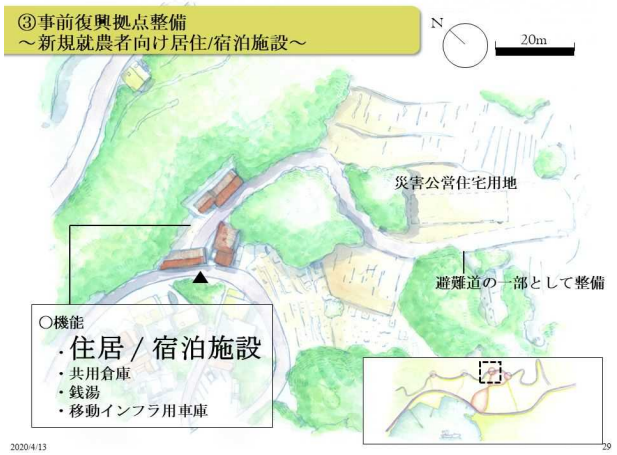
浸水域内世帯数：約400戸（2015年）

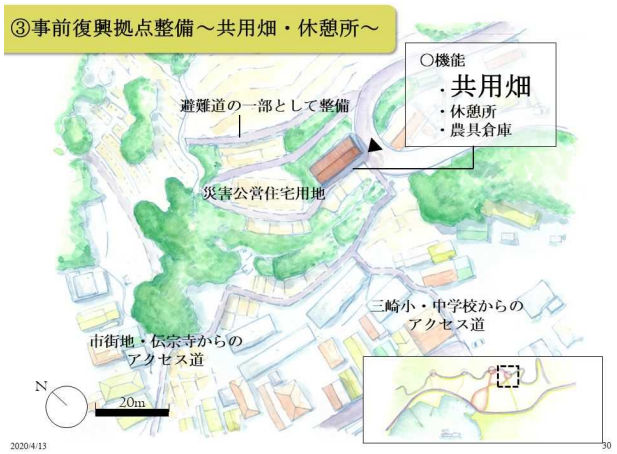
次に，災害公営住宅の用地を高台に確保することを提案します。事前に用地を確保しておくことで，スムーズな住宅供給を目指します。

また三崎内や周辺集落の空き家を把握しておき，みなし仮設住宅として活用します。また今回の「8 の字」プランでは，ただ暮らしを高台に移動するのではない選択肢のある復興計画を目指していきます。これから，徐々に高台と低地を繋いでいくアイデアを説明します。

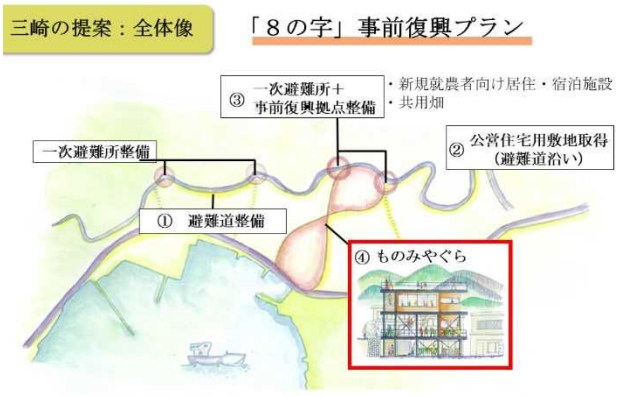


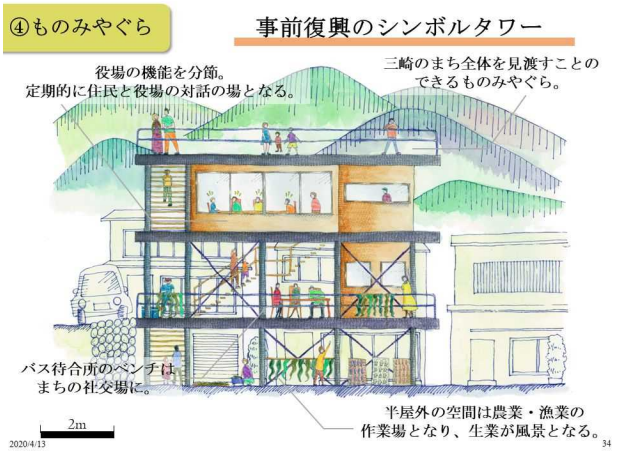
まずは「8 の字」高台部分に復興拠点を事前に準備します。





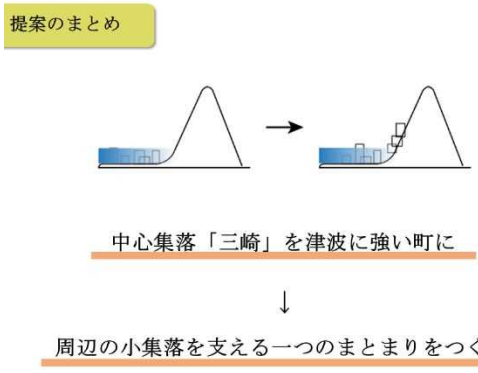
新規就農者が住んだり泊まったりできる機能を中心とした誰でも使えるまちの施設や供用の畑や農業の際に使える休憩所や倉庫など，これらを高台に整備し農家や他住民，新規就農者など様々な人々が日常的に使える拠点を「8 の字」の高台部分に整備し，徐々に暮らしを移行させていきます。

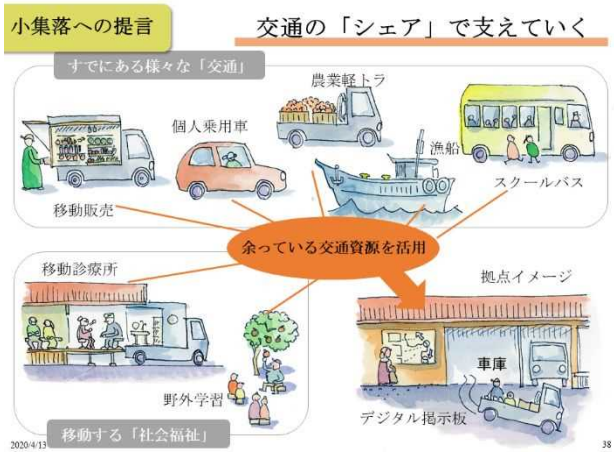




そして「8 の字」の中心部に「ものみやぐら」を造ります。これは現在低地のみに集中している役場機能の分散を主の目的として，一時的な避難タワーや展望台，バス停や誰もが使えるピロティーなど普段よりまちに開かれた事前復興のシンボルタワーとして提案します。これと高台の拠点を一体的に整備することでただ高台を強化するのではなく，高台と低地どちらも行き来するような「まち」を目指します。

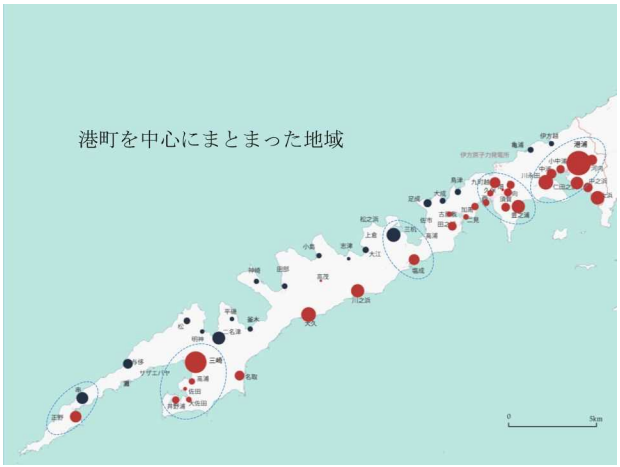
災害後には高台にも低地にも人々が住める「まち」として，また農業，漁業，商業，行政など様々な機能や人々の集まる場所がギュッと集まった三崎らしさを復興していきます。

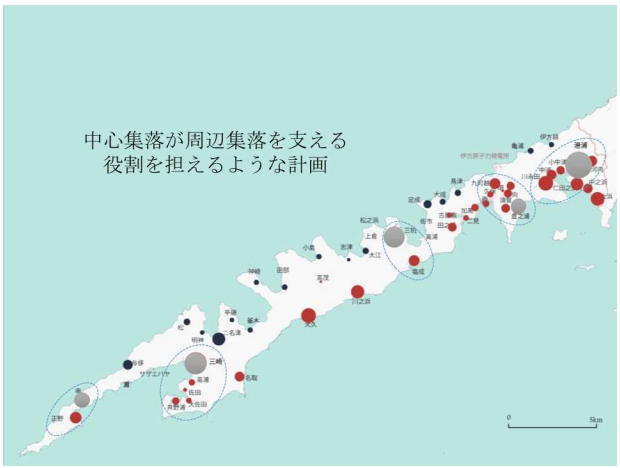




中心集落である三崎を津波に強いまちとすることで，周辺小集落を支えるひとまとまりを作っていきます。
あまっている交通のシェアや生活インフラを移動させ一局集中でない「まち」の在り方を提案します。

1. 佐田岬55集落の概要
2. コンセプトと方針
3. 旧三崎町の現状と課題
4. 旧三崎町への提案
5. **総括**





最後に佐田岬半島全体に向けての今後の展望についてお話します。
佐田岬半島には，数十の集落が点在していますが，それらは港町を中心にまとまりがあります。その中心となっている港町を津波に強い「まち」にしていき，そこと周辺の小さな集落が支えあっていく，そうして，佐田岬半島全体を災害に強いまちにしていきたいと考えています。
以上で，伊方町事前復興プランの提案を終わります。
ご清聴ありがとうございました。